



TITLE:

摘録

AUTHOR(S):

CITATION:

摘録. 地球 1930, 13(5): 389-392

ISSUE DATE:

1930-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183751>

RIGHT:

は今にもボチを呉れるやうに獨乙人はズボンのポケットに手を入れ貨幣の音をたてるが扱てとなつて一文も呉れないと云ふ。音丈け鳴らして正體を見せないのは獨乙人に限らず白人が往々なす處である。邦人は稍もすると正體を見せ過ぎ一本調子であつて損をすることがある。商業上外交上の取引でも常にこの一本調子で損役をひきうけてゐることが屢である。百弗の札を出しこれで少額のボチを受取ることを要求し釣銭なきことを聞くやそれでは次回に與へると云つて家を立ち去つた米婦人を瑞西で目撃したことがあつた。然し本家本元の米國では債にこのボチ制度がないので旅行には氣樂を感じた。只汽車中の黒人に就いて大に閉口された話を屢聞く。然しそれも考へ様である。國內の汽車旅行ですら車内給仕に關して氣を揉むことがある。埃及でピラミッド見物に出かけ駱駝の背に跨りながら御者からバクシツシュ(ボチのこと)を要求され餘りの度々で應ぜぬ時馬子はその度毎に駱駝に一鞭あてる。駱駝は飛び上る。背の客

はそれが恐ろしさに小金を呉れる。機を捉へた御者は更に要求する。文字通りにボチを強請られ身體を揺すられるのはこの時である。

抑もボチと云ふ言葉は或る辭書によれば畿内の語とある何かの隱語から由來したかまた外來語であるか判明せぬが、ボチの事實は等しく世界到る處にありまた旅客にとつて煩はしさを感ぜしめる問題である。これまでの旅行で鈍感になりかけてゐた旅客の頭はミラノで優遇された結果再び敏感に逆戻りボチの多少と相手の顔色とに氣を揉むまでになつた。

摘 録

○小藤博士の『環北太平洋地域の地文』 小藤博士のゲルランド地球物理學雜誌(第二四卷三六八—三七〇頁一九二九年)に記述された所を抄譯すると次の如くで、東亞地體構造論上に多くの暗示を與へて居る。北太平洋は南太平洋から南海諸島によつて立境されて居る。この諸島は古代の赤道地中海帶即ち古生代テーチス海の延長であり殘物であるらしい。環北太平洋の東緣地方には略竝走する高處と中間低地とがあつてエリ阿斯山から眞北西に走り、大洋の境に沿うて

へ、リング海に達して居る。北米大陸の中部から西方に向ふと先づ第一に白堊紀—始新世の間に起つたララミード變革によつて高起された現に三千乃至四千米のロッキー山地がある。ロッキーの中の東部の山脈はコロラド高原、エンディコット山脈からベリング海峽に達してゐる。ロッキーの中の西部は内部高原で其の内にはアラスカ盆地を包有し西に振れて居て東アジアの構造を既に印して居る。之は斷裂地塊及び斷層崖で兩側を境された縮壓斷層で出来た平地であつて、中新世前の花崗閃綠岩で貫かれ、其の上にはコロンビア高原の玄武岩流がかぶつて居る。

ロッキー山地の西方海岸地方にはより古く出来た海岸山脈があつてカスケード山脈、サクラメント地向斜及び大洋海岸山脈の明かな三重地文を示して居る。この海岸山脈は中生代後期、第三紀及び第四紀に太平洋變革によつて生じたものである。山脈の前地の起伏は皆シベリアの尖端地に向つて西方に轉じ、三山脈とも成因及び地質に於てシベリアの尖端と密接な關係のあるのを見逃がせられない。

北西太平洋地域と北米との地文的相似物を發見することを研究すると次の如くなる。ベリング海、オホツク海及び日本海は北西から南東に向ふ即ち地質的には斜走する斷層によつて生じた海溝であつて、カムチャツカ、アナデイル、オホツク地嶺、樺太、シホタアリン、黒龍地嶺及び滿鮮地嶺の間に介在して居る。この三地嶺は地質の走向に斜走して北西から南東に向つて居る。北太平洋兩側の地文的相似は後背地

の著しい相違即ち北米と古き巨大なる歐亞大陸との大きさの違ひがある爲め先天的に全く合一することはない。上記の北米との相似に難しい地方の中には勿論外方に在る千島、北海道、日本主部、琉球及び臺灣等も加はつて居る。スタノヴオイ、大興安の兩山脈並に猶南西の陰山、南山(祁連山)、崑崙及び裏海を越えて高加索の大陸内部の山脈中にロッキー山地の位置を求めるのは未だ甚だ困難である。北米の内部高原の概略な位置を探めるのはもう一層途方に暮らせる。アメリカの海岸山脈に當るものをアジア側に探がすとそれは日本列島の中にあるらしい。日本主部は二つの地質要元から成つて居て、其南翼は卵西に走る古い崑崙であり、北翼は若い太平洋變革によつて生じたものである。而してこの兩脈の相接する所は中央日本に在る。火山索(其の著しいのは琉球弧の内側にある。火山索は島弧の兩端を結ぶ幾何學線である)は花彩列島の大隆側に位置し、大洋斜面には前面海淵がある。従つて北米の太平洋岸と比較するに地相學的同様に或る相違があり且つ此の對照は南海諸島及びオーストラリアと歐亞との境の地方でもつと著しくなる。其の上雁行裂罅(雁行裂罅は褶曲後の伸張又は衝動斷裂によつて生じた捻れ裂罅又は裂開裂罅である)によつて裂開された地塊の移動及び逆時針樣運動はアメリカ側には認められない。

ロッキーは東から壓せられたが、ネゲアダと他の海岸山脈は反對に大洋側から推された。この考からホップス等は東亞の島嶼は太平洋から壓迫されて高まつたとする。其の證據の

一は東亞の島嶼は太平洋の方に常に凸面を向け且つ前面に海淵が規則正しく存在することである。アメリカ側でない此の海淵即ち海溝は地球自轉に伴はれて、受動的に曲線を描く褶曲の形を探るに至つた所の歐亞大陸の輕くて上昇した縁邊部の運動並に能動的に海溝の側壁に與へた壓迫によつて陸に向ふ衝下が起き其の爲めに裂開する階段斷層とを誘起せしめた根本の原因かも知れぬ。然し島弧の生成に關して高い陸地から又は深海からか孰れからでも能動的運動と受動的運動とを區別することは容易いことではない。上記の地形は唯地文的形遷であるに過ぎずして地質的のものではない。地文的と地質的といふこの二つの形容詞は故リヒトホーフエンの支那に關する地質地理學的著述及びデーヴィスの地理的輪廻が公にされて以來込入つて混同されて來た。(N)

○太平洋岩 (アネムーサイト玄武岩) Tom. F.

W. Barth, "Pacifite, an anemosite-basalt". Jour. Washing. Acad. Sci. Vol. 20. No. 4, pp. 60—68. 1930.

太平洋中の火山島に産する岩石には、全く霞石を含まず通常橄欖石を有する長石玄武岩であつて分析の結果ノルムに於て可なり多量の霞石を有するものがある。著者が此の種の岩石の幾種かを研究して到達した結論は此等の岩石中に於て外見上斜長石と見ゆるものは實はアネムーサイト anemosite であると云ふ事實である。アネムーサイトは固溶體としてカ

ーネギー石 $\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$ (此は霞石の成分に相當する) を有する一種の斜長石である。

同一の化學成分を有する岩漿が或る場合には霞石玄武岩と成り或る場合には長石玄武岩と成り、二種の岩石はノルムは同一であつて何れもノルム礦物霞石を有する事が有り得る。

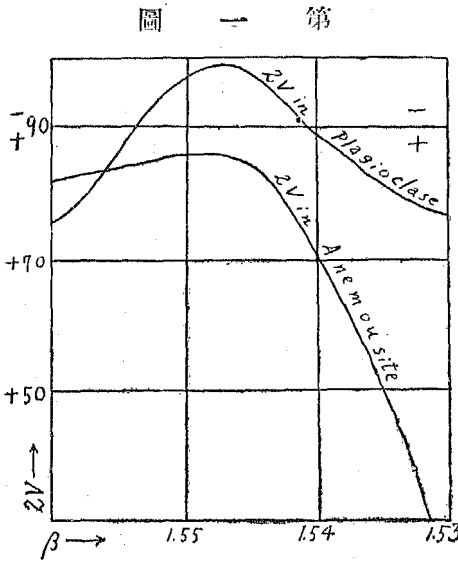
茲に述べる岩石は此の例であつて若し他の條件の下に固結したならば多量の霞石を有する筈であるのに、霞石分子が斜長石に入つた爲めに長石玄武岩と成つた。太平洋中には斯の種の玄武岩即ちアネムーサイトを有する。玄武岩が廣く分布する。アネムーサイト玄武岩を太平洋岩 Pacificite と名ける事を提議する。若し橄欖石を多量に有する場合は之を橄欖太平洋岩 Olivine Pacificite と名ける。

一、太平洋岩の礦物成分 ハワイ群島 ハレアカラ Haleakala 産。多少粗面岩質構造を有し、多量の斜長石の他に橄欖石輝石、鐵鏡を含む。長石の中で斑晶を成すものはカーネギー石分子を含む證據が擧げないから此は成分 50An の斜長石と認める。然るに石基を形成する斜長石は光學的諸性質が全然通常の斜長石の夫れと異り。 $\beta = 1.550$ であるに對して α は 1.545 よりも高く $(+2V) = 60^\circ$ である。 β が 1.550 よりも低い粒を發見しないから霞石やアルカリ長石が含まれてゐない事は確かである。斯る性質を有する礦物はアネムーサイトでなければならぬ。

二、橄欖太平洋岩の礦物成分 ハワイ島 マウナ・ケア Mauna Kea 産。此の岩石は多量の橄欖石斑晶と灰色細粒狀の石

基から成り石基は輝石の小結晶、少量の鐵鑽、柵状の長石微晶から成り長石の一部分は他結晶の間隙を充す長石様微物に移り變つてゐる。

長石は極く僅かに斑晶を成すものがありその成分は 72An であり、石基中の明かな結晶をしたものは $\beta = 1.535 - 1.550$, $(+)2V = 86^\circ$ で基性アンデジンはである。然るに更に酸性の長石は大部分 $\beta = 1.545 \pm 0.002$, $(+)2V = 83^\circ \pm 4^\circ$ なる性質を有し β が 1.540 以下なる粒については光軸角が $+10^\circ$ から $+65^\circ$ までのものが觀察される。即ち此等特殊の長石に



於ては屈折率と光軸角との關係が斜長石系列に於けるものと全く異なる。總ての加里長石と霞石とは光學性が負で混同される事がないから此等長石様の微物はアヘムーサイト系列に屬するものと考へられる。太平洋岩中のアヘムーサイトと斜長石に於ける屈折率と光軸角との關係を圖示すると上の様である。(春本)

新著紹介

○ラツチエル海洋論

古今書院發行 三月 一冊二〇錢

本書は人文地理學者ラツチエルの國民勢力の源泉としての海、政治地理學的研究の第二版(一九一一年版)を譯したものである。海洋を制扼することが如何に民族の發展に資することであるかは吾人日本人の親しく自らを顧みて頗く所である。海洋の人文學的意義、其の肢節の意義、海上支配の要約は本書に於て歴史を顧みながら躍如として論述されて居る。

人文地理學の讀物として決してラツチエルのものは古いとして捨つべきものでないのは明かである。唯本書の譯述は生硬であつてかなりわかり悪い。語句の濫譯の例をあげると「高度の階段に於ける羅針盤」だとか「優秀な海岸組織及び島嶼の發達」などで従つて意味の徹底しない所が多い。慶應大學教授校閲とある以上本譯は眞面目な改譯が讀書界から要求されるべきである。(N)